

論文概要書

帝政前期ローマにおけるダムナティオ・メモリアエ — 改変されたローマ皇帝の記憶と記録 —

福山佑子

古代ローマでは「悪帝」に対してダムナティオ・メモリアエと呼ばれるメモリア（記憶・記録）の破壊が行われていた。19世紀末から元老院が皇帝に対して行ったメモリアを断罪する処罰として知られるようになったこの言葉は、近年では権力者や個人のメモリアに対する攻撃を指し示すものとして近現代史の論文や新聞の見出しなどでも用いられ、広く人口に膾炙している。

権力者が倒れた後、その人物を讃える記念物を破壊することは古今東西で行われてきた。その中で、古代ローマで行われたこの行為がダムナティオ・メモリアエという名で呼ばれるようになった背景には、この社会がメモリアに大きな価値を見出していたという理由がある。特に帝政前期には、皇帝や元老院議員に限らず、ローマ市民や解放奴隷までもが後世に自分のメモリアを伝えることに熱意を示し、競うよう記念物を設置していた。このような状況であったからこそ、メモリアへの攻撃として行われた「悪帝」の彫像や碑文などの記念物の破壊や改変は苛烈な処分であったとされている。同時代の歴史叙述においては「悪帝」の最期のみならず、彼らの死後に行われた記念物に対する攻撃にも紙幅が割かれており、時にはメモリアの破壊などの言葉を用いながら詳述されている。

「悪帝」に対するメモリアの破壊の多くは元老院の決議によって行われた。これは元老院が皇帝のメモリアをコントロールする権限を持っていたかのような印象を与え、時にダムナティオ・メモリアエは元老院の皇帝に対する対抗手段であったとも評されている。しかし、先行研究の大半が個別事例を検討したものであり、僅かに行われた通時的な研究も彫像や碑文などメモリアの破壊が行われた特定の記念物の渉猟に特化したものであるという状況のため、その実像は定かでない。また、これまで行われた研究は破壊の痕跡が明らかな彫像や碑文についての研究に終始し、文献史料に主眼をおいた研究は極めて少ない。そこで本論文では、皇帝と元老院の関与を中心とした、帝政前期のローマの皇帝に対するダムナティオ・メモリアエ像の再検討を目的として議論を進めていった。検討に際しては文献史料を用いた政治背景の考察を主軸としつつ、文献史料の記述と碑文・彫像史料におけるメモリアの破壊の痕跡の差異に留意するという方法で通時的な考察を行っている。

第一章では「悪帝」に対するダムナティオ・メモリアエの先駆例ともされるカリグラの事例を取り上げた。カリグラの暗殺後に元老院で行われた議論では、これまでの皇帝たちのメモリアの破壊も提案されたと伝えられる。この元老院の提案のように皇帝家の人物のメモリアの攻撃を求める決議は、この時に提案されたものが

最初であったわけではない。先帝のティベリウスは30年に元老院に書簡を送ってカリグラの母と兄たちに対する「国家の敵」を決議させており、彼らの記念物を公の場所に掲示することは皇帝の意向に背く行為とされている。この先例の存在が示すようにメモリアへの攻撃は実現可能なものであったにもかかわらず、生前のカリグラと関係が悪かったとされる新皇帝のクラウディウスは元老院の提案を拒否し、更に元老院がカリグラは不名誉な人物であったと定めるよう求めた時もこの決定を妨げたと文献史料は伝えている。これは、カリグラ暗殺が突発的に生じたため、新皇帝となったクラウディウスの政権基盤は即位当初は脆弱であり、軍や民衆といったカリグラを支持していた人々の意向を尊重する必要があったことが理由だと考えられる。このため、歴史叙述では一貫してクラウディウスはカリグラのメモリアを守ろうと行動したことが伝えられている。

歴史叙述においてカリグラのメモリアが守られたとされる一方で、カリグラの彫像や碑文に対する対応は様々である。ユリウス・クラウディウス家の彫像群ではカリグラの彫像の大半が撤去もしくはクラウディウス像に改変されており、彼は皇帝家の一員としての顕彰の対象からも外されている。彫像群のうちカリグラ像が現存しているのはユリウス・クラウディウス家の聖域があるローマ近郊のボウィツラエとクレタ島のゴルテュンのみであり、後者ではクラウディウスが街道建設や土地問題の裁定など積極的な活動を行っている。いずれもクラウディウスと縁の深い場所ではカリグラの彫像が皇帝家の一員として残されているのに対し、格別の繋がりのない地域においてカリグラの彫像が姿を消していることから、クラウディウス自身の命令などによってカリグラのメモリアが破壊されたわけではないことが示されている。

文献史料や彫像群ではカリグラのメモリアを守ろうとする姿勢が確認できるクラウディウスだが、彼の当初の意向とは異なりカリグラのメモリアの多くは姿を消している。これを促したのは、元老院ではなくクラウディウスであったと考えられる。即位から数年が経過した45年と46年にクラウディウスが関与した水道橋と皇帝所領の管理について記した碑文では、カリグラの無思慮によって疎かにされていた修繕や管理をクラウディウスがあるべき姿にしたという文言が記されている。カリグラに言及する必要は特にないこれらの記録において、クラウディウスがあえて彼を引き合いにだして貶めていることから、この時期のクラウディウスがカリグラを批判する意見を発していたことは明らかである。カリグラのメモリアへの攻撃は、このクラウディウスの意向を各地の都市有力者や元老院議員が自発的に汲むことによって実施され、彼のメモリアを示す記念物はその多くが消えていった。この事例では、皇帝や元老院が命令を発さずとも皇帝のメモリアは公の場所からその大半が撤去されている。すなわち、皇帝に対するダムナティオ・メモリアエは元老院が決議して行われるものというイメージが持たれがちであるが、公的な決議や命令がなくとも実施が可能であったこということを、このカリグラの事例は明らかにしている。

第二章では、「悪帝」として広く知られるネロの事例についての考察を行った。彼は属州総督であったガルバが反乱を起こして勝利を重ね、元老院や近衛隊までもが彼の側についたことをうけてローマから逃亡する。元老院はネロを「国家の敵」と決議して彼の殺害を命じ、状況を知ったネロは絶望して自殺する。ただしこの際に決議された「国家の敵」決議がメモリアの攻撃をも内包するものであったかは定かでない。政敵の殺害を正当化するものとして共和政末期に誕生したこの決議は、対象となった人物がローマ市民として保持していた保護の権利を失わせるものであり、これによりネロの殺害や財産の没収が許可された。この決議とネロの死を

受けて、彼の生前は反逆罪となりかねなかった彼の彫像や碑文への撤去や破壊が行われ、首都のみならず帝国各地においても彼の記念物の多くは姿を消している。しかしネロに反旗を翻して皇帝となったガルバの死後、ネロの後継者を自称したオトとウィテリウスによってネロの名誉回復が行われ、一時は「悪帝」とされたネロは讃えられるべき皇帝として再び表舞台で称揚される。この際、一度は撤去された彫像の再設置も行われている。更にウィテリウスがウェスパシアヌスによって倒されると、皇帝就任後に反ネロの姿勢を明確に示したウェスパシアヌスによって再びネロは「悪帝」とされる。

ネロのメモリアへの攻撃の痕跡は意図的な削除や撤去が明らかな形で帝国各地に残されている。その中で1つの特徴を読み取ることができるのが、マイルストーンに残されたネロ名の削除の痕跡である。属州に設置されたマイルストーンでは、トラキアなど東方の属州では名前の削除が行われているのに対し、西方のヒスパニアでは現存する7点全てにおいてネロの名前が残され、彼の死後もマイルストーンとして用いられていた。ヒスパニアはガルバが属州総督を務め、68年に反乱を起こした場所である。一方、東方はウェスパシアヌスが軍を率いて蜂起した場所であり、彼を支持する有力者が多数存在する地域であった。彼らの後ろ盾となった地域において、都市が管理する公共の街道のマイルストーンにおけるネロ名の削除の差異が確認できることから、ネロを倒したガルバよりもウェスパシアヌスが積極的にネロのメモリアへの攻撃を主導した可能性が指摘できる。

元老院は「国家の敵」を決議することでネロのメモリアへの攻撃が可能な状況を作り上げ、ネロの死後には権力者の失墜に対する反応として彼のメモリアの破壊が行われた。しかし、このメモリアの破壊を徹底するような影響を与えたのは、ネロを倒して皇帝となったガルバよりも、ウェスパシアヌスであったと考えられる。彼は自らがネロと69年の皇帝たちによる内乱を鎮めて平和を取り戻したという喧伝を行うが、その際に「悪帝」としてのネロのイメージが強固に構築され、これが彼のメモリアの破壊への後押しとなった。元老院による「国家の敵」決議もネロのメモリアへの攻撃の一助になったものの、この事例では皇帝がメモリアの破壊の実施に大きな影響力を持っていたことが示されている。

第三章では、元老院によってメモリアの破壊が決議されたドミティアヌスについての検討を行った。同時代人としてドミティアヌスの最期を経験したスエトニウスは、元老院議員たちが皇帝暗殺の知らせをうけて元老院議事堂に集い、そこに飾られていたドミティアヌスの記念物を破壊した上で彼のメモリアの破壊を決議したと伝えている。皇帝のメモリアの破壊が元老院決議として命じられたこの事例は、公的なダムナティオ・メモリアエの最初の例とされる。実際、彼のメモリアの破壊はカリグラやネロの事例に比べて大規模に行われており、彼に関連する碑文の現存数は少ない。また、彼のために首都に建設された凱旋門や彫像もことごとく姿を消している。とはいえ、首都の中心でドミティアヌスを讃えるために建設されたオペリスクが彼の名前とともに無傷で現存し、属州でもネロの彫像が姿を消した都市でドミティアヌスの彫像が残されているなど、彼のメモリアの破壊は徹底的に行うことが求められていたわけではなかったことも明らかである。

ドミティアヌスのメモリアの破壊は元老院で決議されたものの、元老院内には依然として親ドミティアヌス派が存在し、皇帝となったネルウァ自身も生前のドミティアヌスと険悪な関係ではなかったことあり、ネルウァ治世下の皇帝と元老院は前皇帝に対して顕著に否定的な態度をとってはいない。また、メモリアを破壊する

決議を行った元老院も、この決議を具体的に実行するような指示を出した痕跡はない。おそらくドミティアヌスのメモリアへの攻撃は、元老院がメモリアの破壊を命じる決議を行ったことに各地の有力者が反応した結果として行われたものであり、それゆえドミティアヌスのメモリアの破壊は必ずしも徹底されなかったと考えられる。

また、元老院議員である小プリニウスがトラヤヌスに捧げた『頌詞』の中で、「悪帝」のメモリアを伝える記念物はその死後に破壊されるべきであると述べているように、この時期には皇帝を「善帝」と「悪帝」に区別する見方が社会の中で定着していた。このような皇帝の区別が明確になった状況で決議されたドミティアヌスのメモリアの破壊を命じる元老院決議は、決議によって破壊の指示が組織的に徹底されたというよりも、「悪帝」に対して自発的に行われると想定されるメモリアの破壊を元老院が決議によって後押しするものとして作用したと考えられる。この決議は必ずしも皇帝への対抗手段となるような意味を持っていたわけではないものの、ドミティアヌスを称賛されるべき皇帝の系譜から外すことは明示されている。このドミティアヌスに対する元老院決議はメモリアの破壊を実行させるものというよりも、彼を「悪帝」と定めることが念頭に置かれたものであったと言えるだろう。

第四章ではコンモドゥスの事例についての検討を行った。彼に対するダムナティオ・メモリアエでは、これまでよりも徹底した破壊や改変が行われている。コンモドゥスの暗殺後に元老院で行われた決議では、彼を元老院や人民の敵、更には神々の敵とまで批難する言葉と共に、彼のメモリアの破壊が求められた。その結果、碑文における名前の削除は元老院議員が関与する記録においても徹底して行われ、マルクス・アウレリウスを讃えるレリーフに描かれたコンモドゥスの姿はあたかも彼が存在しなかったかのような修正まで加えられながら改変されている。皇帝のメモリアへの攻撃の実施に元老院の主導性が確認でき、さらにメモリアの破壊がこれまで以上に徹底されるようになった変化の要因として、先行研究ではダムナティオ・メモリアエが神格化と対になるように変化したことが想定されてきた。しかし、この処分は必ずしも神格化のみと関連して変化したわけではない。コンモドゥスが元老院決議において「神々の敵」と呼ばれているように、アントニヌス朝期に神格化が美術作品や葬祭儀礼において盛んに喧伝されようになる中で、神格化されなかったコンモドゥスを貶めるためのメモリアへの攻撃も激しく行われたという可能性はある。しかしこれだけではなく、神格化も含めたローマ社会における記念物を用いた自己表現の興隆にともない、コンモドゥスに関係する記念物が多数製作されて都市空間を埋めていたという時代状況も、メモリアの攻撃の徹底に寄与していたと考えられる。

元老院決議がはっきりと効力を持っていた期間が僅か3ヶ月であったにもかかわらず、コンモドゥスに対するメモリアへの攻撃は徹底され、数多くの破壊や改変が行われた。後に皇帝に即位したセプティミウス・セウェルスによってコンモドゥスが神格化されるという事態が生じたことにより、積極的に元老院が携わった決定も容易に覆されうることも示されてしまうが、コンモドゥスの死の直後に限って見れば、元老院が皇帝のメモリアに大きな影響を与えていたことは明らかである。このコンモドゥスに対するダムナティオ・メモリアエは元老院が皇帝に対しておこなった攻撃という図式が最も顕著にあてはまる事例であり、「悪帝」のメモリアへの攻撃には皇帝よりも元老院が積極的に関与していた。都市空間を専有していた皇帝のメモリアを元老院が排除したこの事例からは、一時的とはいえ元老院が皇帝のメモリアをコントロールする存在であったことが示さ

れている。

第五章ではセウェルス朝期に行われた事例についての検討を行った。このセウェルス朝期には皇帝のメモリアの破壊が繰り返し行われている。最初の事例となったゲタのメモリアへの攻撃は彼の兄であり共同統治帝でもあったカラカラの主導で行われ、元老院が決議などで後押しをした記録はない。ゲタのメモリアへの攻撃については属州総督の指示書とみられるパピルス文書も残されており、組織的に実施されたと推察できる。また、皇帝名が削除された碑文の36%がゲタのものであるほど多数の事例が存在し、帝国各地で行われたメモリアの破壊では削除の痕跡が露わに残されたものも多い。この皇帝が主導した組織的なメモリアへの攻撃は、後の事例にも変化をもたらす。ゲタの事例において元老院決議がない状態でメモリアの破壊が行われたためか、元老院はカラカラ暗殺後に即位したマクリヌス父子に対しては「国家の敵」を決議して攻撃を行っているものの、以降のエラガバルスとアレクサンデル・セウェルスについてはなんらかの決議をした記録は文献史料に残されていない。また、カラカラについては死後に彼を批難する決議がなされなかったにもかかわらず、碑文からの名前の削除が行われた事例が多数存在する。このようにセウェルス朝期には元老院決議が行われたか定かでない状態で多数のメモリアの破壊が行われている。これは文献史料において記述がないだけかもしれないが、カッシウス・ディオのようにかつての皇帝たちに対するメモリアへの攻撃について明記していた史料からも、セウェルス朝期についてはその姿が消えている。ディオは有力元老院議員としてこの時代を生きた人物だが、彼の作品では彫像の破壊などのメモリアの攻撃が皇帝を攻撃するためのものというよりも、不要となった記念物から国家が経済的利益を得るものとして描写されている。ここからは、決議を行う立場の元老院議員すら皇帝のメモリアを攻撃することにかつてほどの価値を置いていないことが読み取れる。実際、3世紀初めには硬貨や彫像の再利用が頻繁に行われており、皇帝の記念物を再利用して別の用途に充てることは十分想定可能な状況になっていた。ディオのダムナティオ・メモリアエ観はこの時代背景を反映したものと考えられるが、いずれにせよこの時期に皇帝のメモリアへの攻撃からかつてほどの政治的・社会的な意味が失われ、メモリアを重視したローマ社会でこそ行われた処分という側面は消えつつあった。元老院は3世紀を通じて首都の皇帝彫像建立に関わり続けるものの、彼らにとって皇帝のメモリアへの攻撃は皇帝への対抗手段というほどの価値を見出だせなくなっていたと考えられる。

帝政前期ローマの皇帝に対して行われたダムナティオ・メモリアエは、必ずしも元老院が主導して行われたものばかりではなかった。カリグラの事例で明らかなように、権力者が暗殺された後に不要となった記念物の撤去や破壊、改変は、決議などがなくとも行われうるものである。「悪帝」に対するダムナティオ・メモリアエとして最も有名なドミティアヌスの事例においても、元老院は決議によって彼のメモリアの破壊を後押ししてはいるものの、積極的な破壊の実施への関与を行った形跡はない。唯一コンモドゥスの事例は元老院が主導したと考えられ、元老院決議が実効性を持っていた3ヶ月の間にメモリアへの攻撃はこれまでよりも徹底された。しかしセウェルス朝期になると皇帝がメモリアへの攻撃を主導する事例も現れ、元老院が皇帝のメモリアへの攻撃に果たす役割は失われていく。また、帝政前期を通じて元老院が決議を行っていた場合においても、実際のメモリアの破壊には皇帝の意向が大きく影響しており、元老院が皇帝との関係に応じて対応を決めてい

たことは明らかである。これらの考察の結果を踏まえると、皇帝に対するダムナティオ・メモリアエは元老院による皇帝への対抗手段というほどの意味合いは見出だせず、その多くは皇帝との協調関係の中で行われ、あくまで称揚の必要がなくなった皇帝のメモリアの撤去を元老院が後押しするものとして機能していたと考えられる。

1世紀に誕生した皇帝に対するダムナティオ・メモリアエは、2世紀にはその社会的な価値を高めるものの、3世紀初めにはかつてほどの役割を失ってしまう。ダムナティオ・メモリアエを元老院による皇帝への対抗手段とするならば、これは元老院の影響力の低下の現れであったという解釈も想定されうるが、本論文で示したようにこの処分は必ずしも元老院のみと密接に関連していたわけではない。ダムナティオ・メモリアエはローマ社会においてメモリアに価値が見出されていたからこそ処罰として機能しており、その社会的価値の変化は元老院と皇帝との関係というよりも、ローマ社会におけるメモリアの位置付けの変化が表出したものであったと考えられる。